【資料2】

平成25年度　武雄市立御船が丘小学校　学校評価結果

1　学校教育目標
一人一人の個性を尊重しながら、自ら学び、考え、判断していく創造的な知性と豊かな人間性を持つ心身共に健康な子どもを育てる。

2　学校経営ビジョン
○めざす学校像ー児童が明日もきたいと思う学校、明るく活気のある楽しい学校、安全と環境が整備された美しい学校 ○めざす教師像ー児童一人一人を生かし伸ばす教師、「人間力」「教師力」を磨く教師、保護者との信頼を築く教師 ○めざす児童像ー心をみがく　みふねっ子、知恵をはぐくむ　みふねっ子、体をきたえる　みふねっ子

総括的な教育目標を、より具体的な児童生徒や教師、学校の「姿」としてイメージする

3　本年度の重点目標	4　前年度の成果と課題
①心をみがく　みふねっ子の育成 ②知恵をはぐくむ　みふねっ子の育成 ③体をきたえる　みふねっ子の育成	前年度、ほとんどの項目で組織的に取り組むことができた。特に九小国研の会場校となったおかげで、国語や読書の力がついたように思える。ただ、項目が多すぎるために手が回らない項目があり、職員の頑張りがA評価に直結しないもどかしさがあった。また、評価をしようとしてもその活動が具体的に見えにくいものもあり、重点的に何かをおこなって保護者や地域の方に成果を問うためには、「御船の合言葉」とそれに関わる教育活動を体系化し、教育活動の様子をこまめに情報発信することで、家庭や地域の方々に認識していただくことが必要がある。そこで、今年度は大幅に項目を絞ることで職員の目標意識を高め、「みふねの合言葉」を意識した組織づくりをすることで、職員が学校教育目標を常に意識しながら教育活動をおこない、それを保護者・地域に伝えていくようにする。また、学校での学習に、家庭や地域での過ごし方が大きく影響するため、「家庭や地域での好ましい生活習慣の定着」に関する項目を、学校と家庭・地域が連携を図りながら定着させていきたい。

このうち、特に今年度力を入れるものを絞り込む

絞り込むに当たって、特に、前年度、「何ができて、何ができなかったか」を参考にする

5　総括表

①

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策		評価及びその理由	成果と課題
	●心の教育（前田よ・松村・大島）	道徳教育の計画的実践と児童会活動の連携	・児童会活動を通して心を育てる場を年4回設定する。 ・児童活動の振り返りを年3回学級通信で発信する。 ・学校が楽しいと言える子が95%以上を目指す。	・代表委員会で人権意識を育てる話し合いを行う。 ・4回の児童会活動で振り返りの場を設け、思いやりの心や役割意識を継続的に育てる。	B	・「いじめ0の学校」をめざして代表委員会で話し合い、計画的に実践するように支援したため、自分たちで「楽しく過ごしやすい学校にしよう」という気持ちが高まったが「楽しいと言える」が95%に達しなかった。 ・活動後の振り返りを児童玄関や学級で掲示したり、通信で知らせたりしたことで他者の思いにふれ個々の成長を認め合うことができた。	・思いやりの心が楽しい学校生活をおくるために大切であるという気持ちは育っており、集会活動や学校行事を通して励まし合ったり、思いやったりする行動がよく見られるようになった。だが、中間報告の時点で「学校が楽い」が95パーセントに達しなかったので、今まで以上に全校での取り組みを学級づくりにつなげていくように「心の教育」担当からのアプローチが不可欠である。また、体づくり部には、集団作りに有効な学校行事が多くあるので連携を考慮したい。人権意識を高めるために、道徳との関連も考慮しながら自分づくりと集団づくりをしていく必要がある。自分たちが実践したことを道徳的価値の自覚につなげるアプローチも必要である。
	●いじめの問題への対応（大石・石丸）	いじめ0（ゼロ）運動の推進	・「心のアンケート」（がばいシート）の友達に関する項目の「遊ぼうと声をかけてくれる友達がいる」「困った時に助けてくれる友達がいる」といえる子の割合を80%を目指す。（評価得点3．2以上）	・心なかま部と連携し、いじめ“0”キャンペーンを行う。 ・心のアンケートを実施し児童理解と問題解決の手がかりとする。 ・毎週の職員連絡会で、気になる子の情報交換を行う。 ・主幹教諭と生徒指導主任を中心とした指導体制を確立し、担任をサポートする。	A	・「がばいシート」の友達に関する項目「遊ぼうと声をかけてくれる友達がいる」の平均ポイントが3．7、「困った時に助けてくれる友達がいる」の平均ポイントが3．6と目標値を上回ることができた。 ・心なかま部や計画委員会と連携し、いじめ“0”フォーラムの開催や人権標語コンクールなどのいじめ“0”キャンペーンを実施した。 ・いじめアンケートやがばいシートによるアンケート調査や心の相談箱を設置し、児童理解と問題解決の手がかりとすることができた。 ・毎週の職員連絡会で、気になる子の情報交換を行い、共通理解することができた。	・「がばいシート」の結果をみると、子どもたちの良好な友達関係が伺える。 ・心なかま部や計画委員会と連携し、いじめ“0”キャンペーンを実施したことで、子どもたちにいじめを許さない意識が高まってきたように思われる。 ・いじめアンケートの結果を受けて，いじめ対策会議が開かれ、対応を協議するとともに、個々のケースに応じた対応ができた。 毎週の職員連絡会での情報交換で気になる子の共通理解ができた。 ・アンケートによる実態調査を定期的に行う必要性は感じるが、学級担任の負担との兼ね合いで検討が必要である。

②

絞り込んだ重点目標の成果や課題を具体的に評価するためには、どのような項目や指標を盛り込むべきかを考える

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策		評価及びその理由	成果と課題
	●学力の向上（松尾・古川）	基礎学力と学習習慣の定着	CRTテストで、全国平均を上回るように授業法の改善を図る。	・漢字、計算テストを実施し90点以上の合格をめざす。 ・「学習のきまり」を徹底する。	B	・漢字、及び計算検定テストについては、90点以上の合格が達成できた。 ・学習のきまりについては、掲示しているが、その振り返りや指導が学級によって異なる。	前期と後期のまとめのテストの点数を全校で比較した結果、どの学年も全国平均を上回り、90点以上の平均だった。また、漢字や計算の検定テストにおいても90点以上の合格がほとんどであった。学習のきまりについては、学年に応じた約束を決め、取り組んだ。例えば、低学年では「かつおくん」というキャッチフレーズで、休み時間に片づけ、次の時間の準備、おトイレを実行することができた。
	●ICT利活用教育の推進（大石・吉田）	ICT機器の有効活用	・週1回以上のパソコン室・スマートボード・タブレット端末を活用した授業を行う。 ・パソコン室・スマートボード・タブレット端末及び活用ソフトの研修会を年5回実施する。	・校内研修のICT部と連携しての「おもやい研」の定期的な開催。 ・スマートボード、パソコン室、電子教科書の利用状況を月ごとに集計する。 ・これまで作成されたICT資料を整理し、ライブラリー化する。	B	・校内研修の「おもやい研」は目標回数まで実施できていないが、ICTスキルアップセミナーへの参加が多く、スマートボード等を使った授業時数は年度当初より延びている。 ・「おもやい研」が3回しか実施できなかった。	・ICT利活用指導力調査の結果を見ると「授業中にICTを活用して指導する能力」の項目の「わりにできる、ややできる」の割合が4月では77．5%だったのが95．8%に向上した。 ・来年度、タブレット端末が導入されるが、その効果的な活用のための研修を実施していく必要がある。校内研修として、計画的に期日を設定して確実に実施していく。
	○特別支援教育の充実（橋口・片山）	要支援児童の支援体制の確立	・年4回の特別支援の研修をおこなう。 ・特別支援ミーティングを毎月1回おこなう。	・各学級の児童の実態を把握し、特別支援ミーティングや研修を通して、支援のあり方を探る。 ・スクールカウンセラーや関係機関との連携を図る。	A	・定期的な特別支援ミーティングを行い、支援が必要な児童への支援の在り方や他機関との連携について、話し合い、進めることができた。 ・校内研修を通して、通常学級に在籍する児童への手立てについて、研修を深めることができた。	・特別支援学級在籍の児童及び通常学級に在籍する児童への対応を計画的に話し合いを進めることができた。校内で困り感をもつ児童を把握し、職員の共通理解もできた。 ・スクールカウンセラーとの連携も図ることができ、保護者への対応も効果的だった。 ・次年度は、知的障害・発達障害の児童などへの支援の在り方を全職員が研修し、よりよい支援の在り方を学ぶ必要がある。
	○家庭読書（家読）の推進（中島・田澤）	「家読の日」の推進と定着 「リレーうちどく」の奨励	・家読の日の実施率を80%以上とする。。 ・リレーうちどくの実施冊数を一人あたり年間12冊以上とする。	・リレー家読の感想を月1回～2回、おたよりに載せる。 ・放送、掲示、おたよりなどで、月二回の家読の日を呼び掛ける。 ・全校統一したカードを作成し、家読の日に読んだ本の書名を記録させる。	B	・リレーうちどくの感想をお便りに掲載してもらうような呼びかけができなかった。 ・図書委員会の家読の日の呼びかけが十分にできなかった。 ・全校統一したカードを作成できた。	・家読の感想を学級だよりに載せたり、呼びかけたりすることは十分ではなかったが、家読リレーについては、各クラスで実施することができていた。保護者からも、親子で本を読むきっかけになっている、親子で本に触れ合う時間となっているなど、好意的な意見が寄せられた。 ・週末やノーテレビデーは、貸し出しできる本の冊数を増やし、読書を推進することはできた。さらに、お便りや放送など、呼びかけを十分に行うことで、保護者、児童共に家読に対する意識も高まると思う。
	○家庭学習習慣の定着（石丸・大島）	家庭学習の習慣化	・各学年の家庭学習目標時間達成を85%とする。 （低学年30分、中学年40分、高学年60分以上） ・自主学習の取組目標達成を70%とする。 （4年1冊、5年2冊、6年3冊）	・「家庭学習のススメ」を配布し、家庭学習の必要性を伝える。　・家庭学習の定期的な調査を行い、家庭への啓発と定着を図る。 ・宿題以外の自主学習に取り組む課題の出し方を検討する。	A	・各学年に合わせた「家庭学習のススメ」を作成し、家庭学習（自主勉強）の手引きとした。 ・児童の自主勉強ノートにも工夫がみられるようになり、掲示して紹介することで、全校的に前向きに自主勉強に取り組むようになった。	・「家庭学習のススメ」を手引きとして、学校全体で系統性のある取り組みができた。 ・自主学習の取り組み達成は80%以上であり、当初の目標には到達することができた。 ・定期的な家庭学習調査ができず、継続した実態の把握が難しかった。 ・お便りなどでの家庭啓発をする機会が少なく、定着を図る手立てが不十分であった。 ・ICT機器と宿題・家庭学習の関連やあり方について、検討する必要がある。

③

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策		評価及びその理由	成果と課題
	●健康・体つくり（千綿・大嶋・桑原）	体力の向上及び望ましい食生活習慣づくり	・新体力テスト等で児童の実態を把握し、授業や業間運動等で適切な指導を行いながら前年度よりも体力の向上を図る。 ・食育指導を計画的に実施する。	・新体力テストの結果を児童に配ることで自身の体力を知らせ年間のめあてをもたせて運動生活を送らせる。 ・休み時間は外で元気に遊ぶ事を奨励する。 ・体育的行事の計画的指導を行う。 ・「お箸がんばろう」週間を設け箸認定書を配布する。 ・校医の先生と連絡を密にし、毎月第3木曜日の健康相談日に適切な指導助言をいただく。	B	・4月と12月のスポーツテストの結果から50m走の向上率は、64%であった。実施時期や授業での取り上げ方などに課題があった。 ・スポーツテストの結果から体力向上の計画を立て、みふねリンピックやパワーアップ運動の計画を立てた。各行事との関係でなかなか実施できない部分があった。	・各運動週間（パワーアップ、なわとび、かけっこ）を設定することで、運動場に出て運動をしている子が増えてきた。 ・平成25年度全国運動能力テストの結果から全8種目中7種目で全国、佐賀県平均よりも落ち込んでいた。意識調査から社会体育に所属している児童と所属していない児童で運動時間に格差があることが分かった。 ・教科体育における学習カードの充実・整理と学習カードを使った指導の工夫を行う。
	○食育推進（橋村・浦郷・山口直）	望ましい食習慣の形成	・5校時給食を推進し、残菜を一人1日1g未満とする。 ・お弁当の日を年間5回設定する。 ・年間計画をもとに栄養職員を使った授業を年10回おこなう。	・放送による食育指導と児童によるポスター作成の実施。 ・お弁当の日を設定し、児童が準備や片づけに関わるよう啓発を行う。 ・各学年に応じた栄養職員の活用を図る。	B	・食育月間や毎月19日の食育の日に武雄の食育指導内容や時節に応じた内容を校内放送・掲示物で知らせた。 ・年間計画に基づいた食育の目標を月ごとに各教室へ掲示できるよう整備した。	・5校時給食推進の一つとして、食育に関わる指導内容を給食委員会の児童が掲示物や放送、児童集会で全校児童に啓発することができた。 ・食育の目標の教室へ掲示により、児童と職員への啓発を図ることができた。 ・お弁当の日の前日には、児童が関われるよう啓発ができた。 ・残菜は一人1日2g程度にとどまり、一人1日1gへの手だてが不十分であった。 ・栄養職員が総合的な学習の時間において調理に関わることができたが、日程調整が難しかった。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目							
領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策		評価及びその理由	成果と課題
	●小学校低学年の学習環境の改善充実（古川・黒木・前田い）	低学年における学習習慣・生活習慣の定着	・幼保小の連携、家庭との連携を図り、学習習慣、生活習慣の目標達成率を90%以上定着させる。	・幼保小の連携、家庭との連携を図り、学習習慣、生活習慣の目標達成率を90%以上定着させる。	B	＜成果＞ ・88%の児童が基本的な生活習慣、学習習慣の定着が見られた。担任を含め多数の教員で声かけを行ったり、こまめに家庭への連絡を行ったり、個別指導・補充指導を適宜行ってきた成果と言える。また、学年の話し合いを密に行いながら共通意識をもって指導を行ってきていることが指導の効果を高めている。 ＜課題＞ ・低学年の指導（躾）が、中学年、高学年の成長の基礎となっていく。整理整頓、話の効き方を含め今後とも指導を継続していきたい。	・学年で徹底させたい学習態度や生活習慣について共通理解し、ピカイチカードを利用し家庭との連携を図りながら指導に当たったので、授業に集中できるようになり、学習の約束も守れるようになった。 ・家庭学習、生活習慣・学習習慣の定着については、懇談会、家庭訪問等を通じて家庭への周知を図り、家庭との連携を図っていった。家庭の協力もあり、学習用具の準備、宿題の提出、朝の登校などきちんとルールを守れるようになった。 ・学習面でも生活面でも教師の支援や友達の協力が必要な児童がいる。学級を超えたサポートをしてはきたが、効果的な支援（児童、保護者、担任に対して）や協力体制を更に整えていく必要がある。

6　総合評価
・いじめ0フォーラム実施に向けて学校、家庭、地域が連携して取り組み、実現できたことは大きな成果である。いじめをなくすことについて3者が真剣に話し合う事ができた。また特別支援教育においても特別支援ミーティングを定期的に行ったり気に係る子の情報交換会を定期的に行ったりして児童把握に全職員で務め、児童の安心・安全して生活できるいじめのない学校づくりに努めた。 ・学習状況調査では学年によって達成率が異なる。全学年で成果を出せるように指導法の工夫が必要である、スポーツテストの結果も県平均を下回る項目が多く、次年度は体力向上の対策をとる必要がある。

7　来年度の改善策
・次年度はタブレットが全児童に配布される。反転学習をはじめ、更にICT利活用教育を勧めていく必要がある。またICT機器の活用を通した言語活動を充実した学び合いを展開し学力向上につなげていく。 ・体力向上を図るために体育科の指導法を工夫し、運動量確保と共に生涯体育につながるよう運動の特性に十分触れさせる学習展開を心がけていく。また体育的行事の工夫と、運動環境をの充実を併せて取り組んでいく。 ・心の教育は教育相談、特別支援教育、生徒指導、特別活動等の連携を強め、組織的に取り組んでいく。また家庭、地域との連携も深め、今まで以上に子どもたちが安心して通え、楽しい学校にしていく必用がある。

●は共通評価項目、○は独自評価項目